

## 組織目標評価報告書(平成30年度)

6-2

部局名: 医学部保健学科

部局長名: 竹田 芳弘

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>	
<b>①-1 目標</b>	<b>①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>1. 入試の実施状況</p> <p>①専門高校・総合学科卒業生入学試験を含めて保健学科で実施している多数の入試方法について今後の方針について検討する。</p> <p>②グローバル化の一環として国際バカロレア入試を定員化し推進する。</p> <p>2. 教育の実施体制</p> <p>①専攻を超えての講義枠の拡大を推進する。</p> <p>3. 教育方法・内容</p> <p>①タグ機能付き映像アノテーションシステムによる授業を発展させ、各専攻に合わせたタグ情報によるシミュレーション演習・実験の充実を図り、アクティブ・ラーニングを進める。</p> <p>②4学期制により可能となった留学や国内外研修・インターンシップ・ボランティア活動を充実、推進させる。</p> <p>③臨床実習、臨床実習の前後にOSCE(Objective Structured Clinical Examination)を行うことで実習の充実化を図る。</p> <p>4. 教育の成果</p> <p>①WBT(Web Based Testing)、CBTを行うことで実習前の基礎専門知識の到達レベルの評価をするとともに、卒業前には国家試験レベルのWBT、CBTを学生の自主学習も含めて行い、国家試験における高合格率の維持に努める。</p>	<p>・専門高校・総合学科卒業生入学試験については2020年度入試より募集を停止し、募集定員を推薦入試に移行することとした。</p> <p>・国際バカロレア入試については定員化を行い、今年度も受験生があり合格者を選出した。</p> <p>・ローカルサーバーを利用したアノテーションシステムを、シミュレーション演習等に取り入れ、医療技術の習得や患者接遇などに活用している。学生自身による映像の振り返りと教員や第三者からの指摘により、学生は技術の問題点等を客観的にとらえることができ、アクティブ・ラーニングへとつながっている。また、ローカルサーバー上で保存された映像を、ODネット上に設置されているサーバーに送ることによって、実験室単位の少人数からさらに広いセミナー室、講義室などでこの映像を利用することが可能となった。今後、これらの映像コンテンツをゼミや講義へ活用するために、ICTを利用するシステムづくりが早急の課題であると考えている。</p> <p>・大学病院や他施設での臨床実習における事前学習として、実習前の疑似体験のためのVRコンテンツ導入を行った。全天球カメラという特殊なカメラで撮影した映像を、VRビューワーを装着したVRゴーグルで視聴することによって疑似体験を可能にし、その後の実習・実験等における理解度および知識の定着率の向上など教育効率の改善を図った。このVRコンテンツは、高大連携事業である高校生の大学訪問における学科紹介や病院紹介にも活用しており、高校生からの評価も良好である。</p> <p>・OSCEについては、臨床実習に臨む前に接遇等を含め、ロールプレイ等の演習を行い、実習へのモチベーションの向上に努めている。ロールプレイの模様をアノテーションシステムを活用して映像による振り返りを行い、臨床実習の意義を確認するとともに技術の習得に努めている。今後は、アノテーションシステムの録画にタブレットを使用するシステムを導入する予定である。タブレットというフレンドリーなインターフェースを利用することによって、映像の振り返りがより簡便になり、OSCEさらには臨床実習における技術習得への寄与を高める計画である。OSCEなどの学内実習においては、模擬的に臨床環境をどこまで作り出せるかという課題がある。それに向けてICTを活用したOSCEのシステムづくりを検討する必要があると考えている。</p>
<b>①-2 年度計画との関連</b>	
<p>アクティブ・ラーニングの拡充</p> <p>学生の留学経験者数の拡大</p>	<p>・講義・演習内容の充実を図り学生のアクティブ・ラーニングを進めた。</p> <p>・国際関係WGにより学生の留学について検討し留学人数を拡大した。</p>
<b>①-3 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
<p>1. 入試の実施状況</p> <p>①入試(前期・後期・推薦)の志願倍率、②国際バカロレア入試の志願者数</p> <p>2. 教育の実施体制</p> <p>①専攻を超えての講義数</p> <p>3. 教育方法・内容</p> <p>①アクティブラーニング授業科目数</p> <p>②外国人留学生の受入・日本人学生の海外派遣数</p> <p>4. 教育の成果</p> <p>①看護師、保健師、診療放射線技師、臨床検査技師の国家試験合格率</p> <p>②卒業生の就職率</p>	<p>・志願倍率:前期日程2.1倍(29年度2.1倍)、後期日程8.6倍(29年度8.7倍)、推薦入試4.8倍(29年度4.7倍)</p> <p>・バカロレア入試志願者数:4名(うち3名が合格・入学)</p> <p>・専攻を超えての講義数:専門基礎科目23科目</p> <p>・アクティブラーニング授業科目数:4科目</p> <p>・外国人受入数:5名(特別聴講学生3名、特別研究学生2名)</p> <p>・日本人学生の海外派遣数:75名</p> <p>・卒業生就職率:96%</p>
<b>②研究領域</b>	
<b>②-1 目標</b>	<b>②-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>・保健学科の研究領域については、保健学研究科にまとめて記した。</p>	
<b>②-2 年度計画との関連</b>	<b>②-2 大学全体への貢献</b>
<b>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
<b>③社会貢献(診療を含む)領域</b>	
<b>③-1 目標</b>	<b>③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>・国際交流を推進するために国際交流関係WGで議論を重ね、新たな外国の大学を含めて相互交流を推進する。</p> <p>・「保健学研究科オープンフォーラム」を開催し、高大連携、社会人大学院生の入学を推進する。</p> <p>・「保健学科長と語る会」を随時開催する。</p>	<p>・国際交流関係WGで検討を進め、新たな学生の交流先として、釜山カトリック大学との国際交流協定(部局間協定)の締結を行い、講義の一環として学生を派遣した。チーム医療演習では46名、global practiceでは2名、東北タイ研修では4名など、多く学生が海外研修を行った。</p> <p>また、海外からの受入れとしてはタイのシーマハサラカム大学から6名、O-NECUS留学生が3名、post O-NECUSで1名、ミャンマー国費留学生が2名であった。</p> <p>・「大学院保健学研究科オープンフォーラム 2018」を『保健学科の設立20年を顧み、今後を創造する』というテーマで10月27日に開催し、研究科長や医学部長からのメッセージ、海外留学経験のある学生によるメッセージ、医療や研究で活躍する卒業生からのメッセージを発信した。高校生、学部生、大学院生、社会人に対して学科創立20周年の記念行事を行い、高校生からの評価も高かった。</p> <p>・「保健学科長と語る会」を高校生の都合に合わせて随時開催し、高校生からの様々な質問に答えることで保健学科の魅力、保健学科の目指す医療人の重要性などを伝えた。</p> <p>・高校生大学訪問は昨年度と同様に行い、多くの高校から高校生が参加し、模擬講義、演習を行った。</p> <p>・岡山大学附属中学校から12月5日に中学生訪問を受け、講義、実習などを行った。</p>
<b>③-2 年度計画との関連</b>	
<p>国際通用性のある医療人育成</p>	<p>・講義枠の中で医療系の大学などへの留学の機会が増えることで国際性意識を持った医療人の育成を推進することができた。</p>
<b>③-3 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>③-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
<p>国際交流による派遣者数、受入れ数</p> <p>「保健学研究科オープンフォーラム」、「保健学科長と語る会」の参加者数</p>	<p>・国際交流による派遣者数、受入れ数ともに増加に向けて対応できた。</p> <p>・「保健学研究科オープンフォーラム」の参加者数:135名</p> <p>・「保健学科長と語る会」の参加者数:5名</p>

<b>④管理運営領域</b>	
④-1 目標 ・保健学科の管理運営領域については、保健学研究科にまとめて記した。	④-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
④-2 年度計画との関連	④-2 大学全体への貢献
④-3 目標とする(重要視する)客観的指標	④-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<b>【総括記述欄】</b>	
<p>全体的に各領域ともに今年度の目標は概ね達成できた。教育領域においては、懸案であった入試改革を進めることができた。また、タグ機能付きアノテーションシステムによるシミュレーション演習を今年度も充実化させ、さらにVR化を進めることで学生のアクティブ・ラーニングにつなげることができた。社会貢献領域においては、国際交流関係を昨年と同様に継続・発展することができた。</p>	